

TAKEMURA Tamio

竹村民郎著作集

II

モダニズム日本と 世界意識

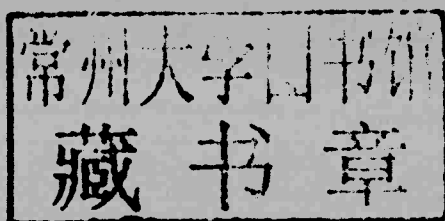
三元社

TAKEMURA Tamio

竹村民郎著作集

II

モダニズム日本と 世界意識



三元社

[著者略歴]

竹村民郎（たけむら・たみお）

1929年、大阪生まれ。

元大阪産業大学経済学部教授。国際日本文化研究センター共同研究員。

著書

『独占と兵器生産——リベラリズムの経済構造』勁草書房 1971年

『廃娼運動——廓の女性はどう解放されたのか』中央公論社 1982年

『笑楽の系譜——都市と余暇文化』同文館出版 1996年

『関西モダニズム再考』（編著）思文閣 2008年

『増補 大正文化 帝国のユートピア——世界史の転換期と大衆消費社会の形成』三元社 2010年

その他共著、論文多数。

モダニズム日本と世界意識

竹村民郎著作集 II

発行日 2012年1月25日 初版第1刷発行

著者 竹村民郎 ©Takemura Tamio

発行所 株式会社三元社

〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル

電話／03-3814-1867 FAX／03-3814-0979

郵便振替／00180-2-119840

印刷＋製本 株式会社理想社

コード ISBN978-4-88303-302-7

モダニズム日本と世界意識 竹村民郎著作集Ⅱ 目次

一九世紀末葉日本における海洋帝国構想の諸類型

創刊期『太陽』に関連して……………7

一九世紀末葉ハワイにおける日本人移民社会の日本回帰

多民族社会における日本人移民のアイデンティティ形成に関連して……………31

世界一周の夢を実現したパイオニア群像

東京・大阪両朝日新聞社主催「世界一周会」によせて……………71

大阪・神戸開港と余暇社会の形成 第五回内国勸業博覧会の開催……………123

近代日本における知識人のアジア認識

瀧川辨三、儀作のアジア観を中心として……………165

二〇世紀初頭わが国の都市における国際認識の成立過程

日中経済同盟問題に関連して……………217

孫文の日中経済同盟論とその周辺

瀧川辨三、儀作の実業思想に関連して……………253

一九二五年中国東北部で開催された大連勸業博覧会の歴史的考察

視聴化された満蒙……………283

科学と芸術の間 池田菊苗と夏目漱石の場合……………333

一九二〇年代日本における

大量消費社会の萌芽的形成とイノベーション……………353

一九二〇年代における鉄道の時間革命 自動連結器取替に関連して……………387

潰えた政党政治のシナリオ……………417

「大正文化」の断面……………431

一九二〇年代日本の未来論	461
--------------	-----

棋士集団の誕生	481
---------	-----

晶子明星	493
------	-----

中村真一郎と田端	499
----------	-----

対談 田端文化村を語る 近藤富枝×竹村民郎	511
-----------------------	-----

初出一覧	533
あとがき	536

モダニズム日本と世界意識

竹村民郎著作集Ⅱ

故竹村由紀子に捧げる。

モダニズム日本と世界意識 竹村民郎著作集Ⅱ 目次

一九世紀末葉日本における海洋帝国構想の諸類型

創刊期『太陽』に関連して……………7

一九世紀末葉ハワイにおける日本人移民社会の日本回帰

多民族社会における日本人移民のアイデンティティ形成に関連して……………31

世界一周の夢を実現したパイオニア群像

東京・大阪両朝日新聞社主催「世界一周会」によせて……………71

大阪・神戸開港と余暇社会の形成 第五回内国勸業博覧会の開催……………123

近代日本における知識人のアジア認識

瀧川辨三、儀作のアジア観を中心として……………165

二〇世紀初頭わが国の都市における国際認識の成立過程

日中経済同盟問題に関連して……………217

孫文の日中経済同盟論とその周辺

瀧川辨三、儀作の実業思想に関連して……………253

一九二五年中国東北部で開催された大連勸業博覧会の歴史的考察

視聴化された満蒙……………283

科学と芸術の間 池田菊苗と夏目漱石の場合……………333

一九二〇年代日本における

大量消費社会の萌芽的形成とイノベーション……………353

一九二〇年代における鉄道の時間革命 自動連結器取替に関連して……………387

潰えた政党政治のシナリオ……………417

「大正文化」の断面……………431

一九二〇年代日本の未来論	461
--------------	-----

棋士集団の誕生	481
---------	-----

晶子明星	493
------	-----

中村真一郎と田端	499
----------	-----

対談 田端文化村を語る 近藤富枝×竹村民郎	511
-----------------------	-----

初出一覧	533
あとがき	536

一九世紀末葉日本における海洋帝国構想の諸類型

創刊期『太陽』に関連して

1 創刊期『太陽』の海洋帝国構想

日本近代文化のイメージと性格と、そしてそこから生まれた歪みの問題とを考える場合、環太平洋経済圏という「地域概念」を入れて考えると、これまで「明治秩序」の枠内でとらえてきた文化空間にたいする歴史認識を疑うこととなる。これは陸地中心の歴史認識のパラダイム転換につながるだろう。一八六八年明治維新を契機とした近代日本国家の成立期は、琉球、北海道のアイヌを経由した列島南北の交易圏、さらに対馬經由による朝鮮との交易圏の清算と、単一民族史観に結びついた海洋帝国構想とが同時に進行した時期であった。そうした自生的なアジア貿易圏の途絶と、富国強兵と結びついた帝国日本の形成が日本社会と文化の在り方を決定的に制約したことはいうまでもないだろう。

私は冒頭に述べた課題にアプローチするにあたって、日清戦争（一八九四～九五年）末期の一八九五年に創刊され、わが国を代表する総合雑誌の一つであった『太陽』にあらわれた海洋国家論に焦点をしばって考察するこ

ととする。対象とした論文、記事は、『太陽』第一巻・第二巻（一八九五～九六年）所収である。

地中海がイスラム勢力、ヨーロッパなど数々の異なった文明の対抗、交流の空間であったことを描いた大著『地中海』(La Méditerranée et le Monde Médiéval à l'Époque de Philippe II) がフェルナン・ブローデルによって書かれたのは一九四九年であった。ブローデルの名著は海洋から歴史をとらえることによって、従来の陸中心の歴史認識からの脱却を明瞭に示すものであった。われわれはこうしたところから出発して、移民、植民の展開をみ、工業、海運、貿易の発展や海軍形成を考えていくならば、一九世紀後半環太平洋という新しい文明圏を形成できるか否か、ここに近代日本の盛衰を解く鍵があったことを確認するであろう。そうした意味において、例えば、琉球の研究や網野善彦氏、秋道智彌氏ら国立民族学博物館グループ、後藤乾一氏らがしめておられるような努力と方向は、大いに賛意を表すべき点でなければならない。そこで私の問題であるが、私も歴史家の端くれとして、都市における国際認識、日中貿易、在日華僑、辛亥革命、孫文の三民主義におよぶ視野のなかで、日中経済同盟の問題について書きつづけているのである。

私のことは、しばらく別とするも、私はここに近代日本の海洋帝国形成についての研究がまず確認しなければならぬ重要な視点を提起するであろう。それは古来から東アジアに君臨してきた中華冊封体制を解体させ日本がアジアの覇権を獲得する契機となった日清戦争が、日本の進路にあたえた影響が正しく問題にされなければならないということである。端的にいうならば日清戦争後、日本の政治、経済、軍事、教育等の再編成が、海洋帝国構築という目標と結びついて進行していったということである。近代日本の海洋帝国形成の研究が、より学際的な視点をもって日清戦争後の社会を系統的に分析するべきであるという大きな理由はそこにある。

日清戦争後ジャーナリズムの領域において、海洋帝国形成の思潮をもっとも積極的に提起したのは、博文館が一八九五年一月に創刊した総合雑誌『太陽』であった。博文館は一八九四年八月より刊行した『日清戦争實記』が大ベストセラーとなり、その元手によって総合雑誌『太陽』を創刊した。当時日清戦争勝利の結果として、わ

が国社会に日本帝国の国際的地位の増大についての意識が拡大しつつあったことは、『太陽』発刊の辞のなかに読みとることができる。そこには「今後の同胞四千餘萬は復た深窓に眠るの日本人に非ずして、五大州中に闊歩するの大日本人と爲れり。豈我邦第二の維新を爲す時ならずと言はんや」という言葉がみえるが、それこそ戦後の近代国民国家主義の高揚を反映するものであった。

問題はこうした近代国民国家主義のイデオログであった知識人、実務的知識人の海洋国家構築の意志がどのように『太陽』に反映したのかということである。もとより彼らの主張や時勢判断はいまだ未熟であり、アジアにおける海洋帝国形成の構想についてもその議論はけつして一様ではなかった。むしろ彼らは自分たちの警世論を積極的にとりあげてくれる『太陽』を支持したのである。つぎにそうした海洋国家論の系譜の一端をみることにしよう。

『太陽』創刊号に改進黨総理大隈重信は談話をよせていう。

清國の弱きと意想の外に出で、我が陸海軍は連戰連勝の勢ひに乗じて、既に盛京省の過半を占領し、海上權をも掌握するに至りしが故に、其の希望は彌々益々増進せるのみ、此の度合を以て推測せば、我が勝利と要求とは比例して殆んど其の際限なかるべし……清國を處分するは最早我が自由なり、我が意のまゝなり、臺灣をも併せ取るを利とせば無論遠慮なく之を取るべし、此の間何の國が敢て容喙し干渉するの權利と力とあらんや

一八九五年四月の三国干渉が象徴するように、中国にたいする日本の覇權は、欧州列強の日本にたいする干渉によつて挫折した。大隈の談話はいわば戦勝気分に乗じた彼独自の樂觀的時世論に過ぎなかった。大隈談話の後半では彼の樂觀論はしりつばみに後退した。彼は戦後日本の状況について、軍勢力を拡充して東アジアの覇權を

確保するか、列強の干渉に屈服するか岐路に立っていると、戦後日本の急務は軍備拡張にあることを強く警告した。

海軍は列國聯合の艦隊に當るに足るまでの軍艦を備へざる可らず

……

陸軍は我が國境以外に二十萬以上の兵を出すを得るまでに増加せざる可らず列國連合するも、到底二十萬の陸兵を東洋に出すの力なし

日清戦争の勝利が明瞭になるなかで、国内外の体制固めを急ぐために、国防を一段と重視する傾向が強まってきた。まさに右の大隈談話はそうした状況を反映したものであった。たしかに一八九五年は日本にとつて軍備拡張のみならず、経済を構造改革すべき重要な転期であつた。当時の日本の工業力の一般的水準からして、戦後列強による中国再分割競争で日本が敗北する可能性はきわめて高かつたのである。『太陽』創刊号で法学士井上辰九郎は「經濟的闘争」を書き、統計を基礎として日本の産業、農業、商業および貿易等の実状を説明し、加えてそのいずれの領域においても欧米の水準に比較するとわが国がはるかに幼稚であると述べている。彼はさらに各国との經濟闘争のなかで日本が優位に立つためには、「農工商業に對して消極的方針よりは積極的方針」を採り、「自由放任の主義よりは保護干渉の主義を以て實業政策に關する國是となすべき」と説いた。例えば、海洋帝國の重要な要素として「戦勝の爲め海軍の勢力大に加はりたると戦後商艦の數過多なるべきとは大に航路の擴張及殖民事業の進歩」に資するものであると指摘している。

『太陽』第二号の高等商業学校教授飯田旗郎「亞細亞の大商戰」は、アジア市場における日本の輸出入実績が清商の商權拡大によつて急速に減少傾向にあるという認識からこれを論じ、「我帝國人民が今日征清戦争の大捷を絶